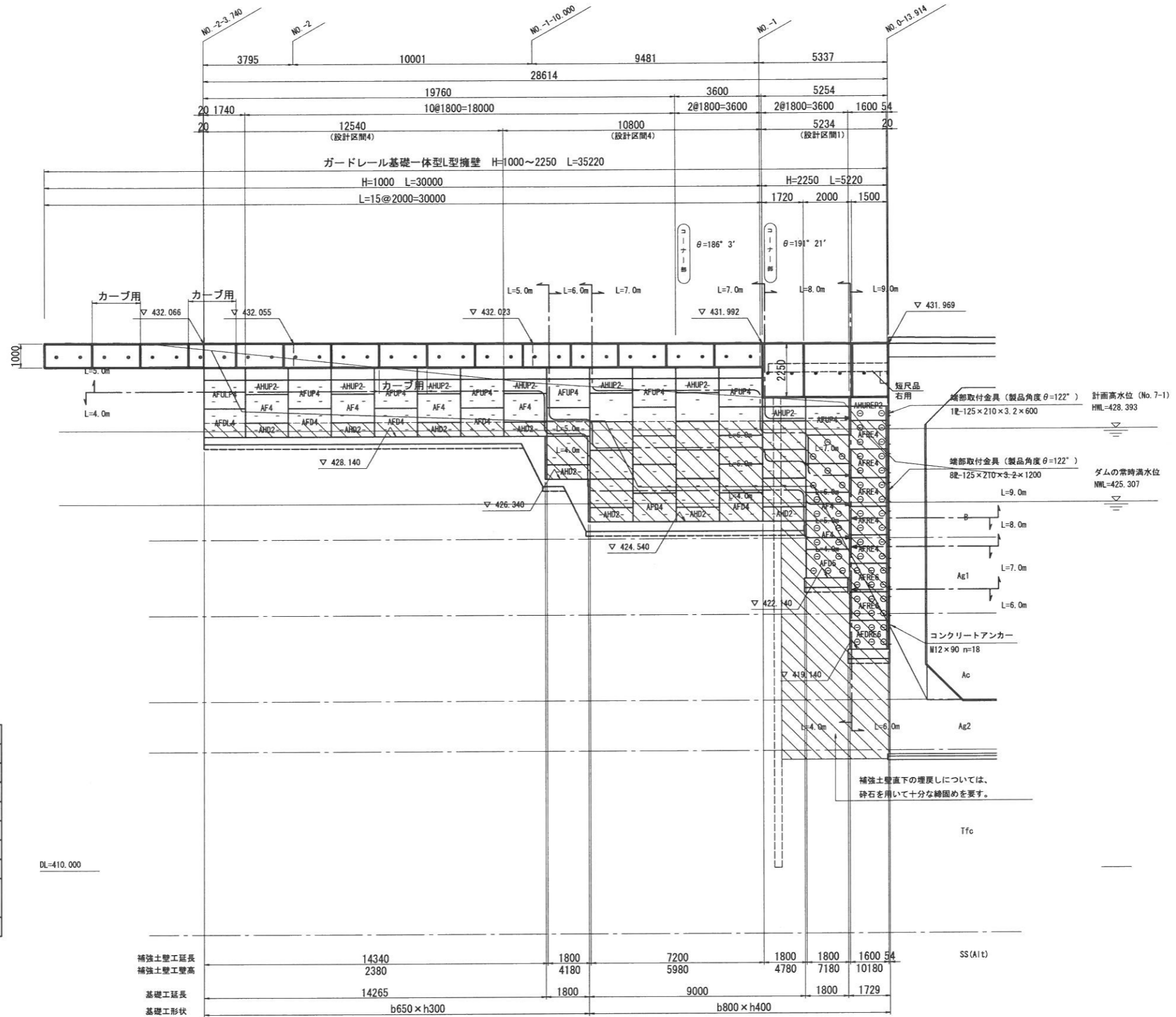


起点側 帯鋼補強土壁工法展開図

正面展開図 S=1/100



設計条件 (内部安定計算)

補強土壁の最大高さ	Hmax=12.580m	
壁土の性質	土砂部	$\phi=30^\circ, \gamma=19.0\text{KN/m}^3$
	砕石部	$\phi=35^\circ, \gamma=20.0\text{KN/m}^3$
設計水位 (H.W.L.)	H.W.L.=428.393m	
土とストリップとの間の摩擦係数	$\mu=1.5 \sim \tan 36^\circ$	
設計水平量度	kh=0.15 (中規模II種)	
安全率	常時	2.00
	地震時	1.20
鋼材の許容応力度	ストリップの引張りに対し (SS400)	140N/mm ²
	ボルトのせん断力に対し	200N/mm ²
壁面材の設計基準強度	$f'_{ck}=30\text{N/mm}^2$	

特記

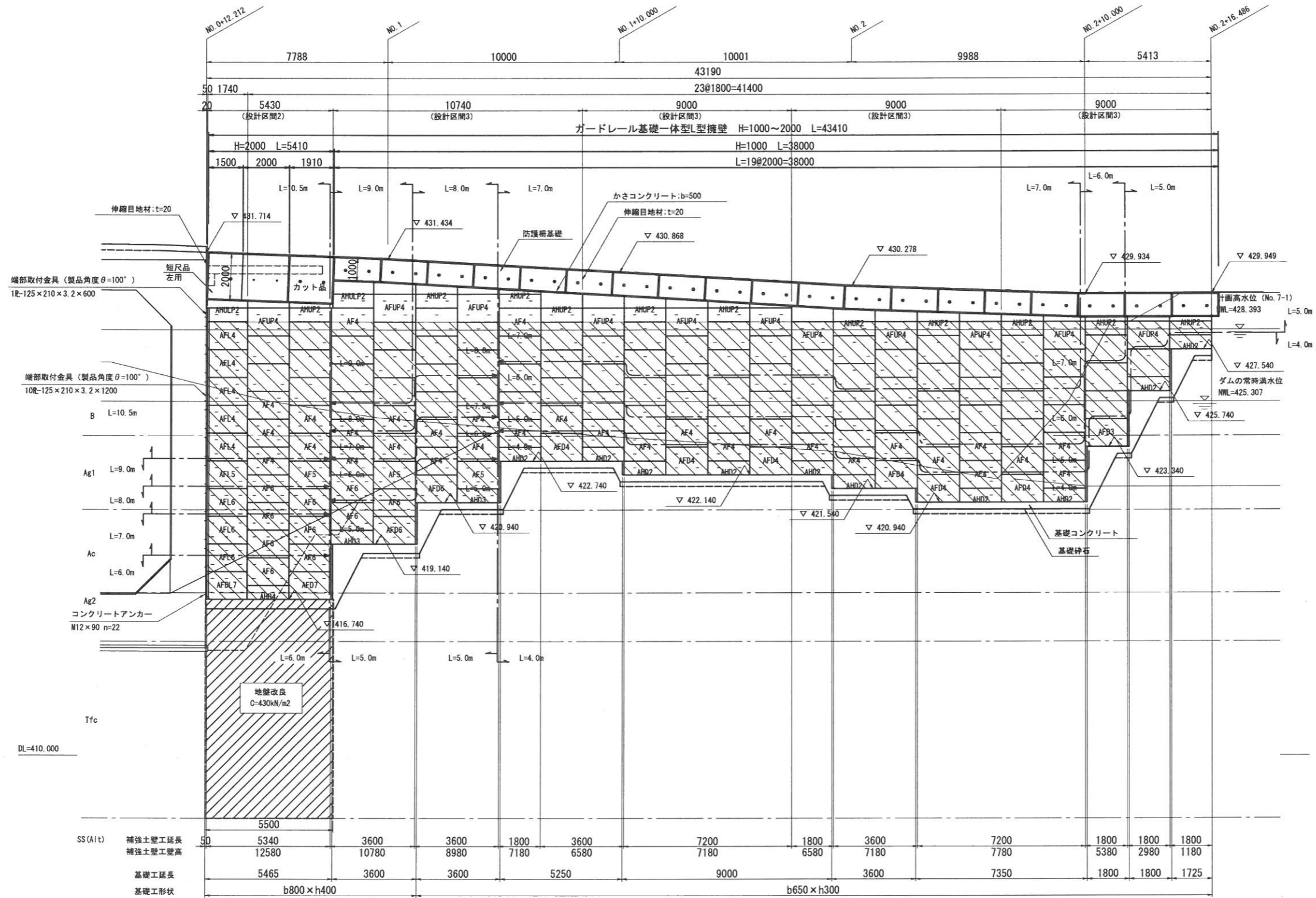
- 壁土材料は、次に示す [A1] もしくは [A2] 材料を使用することを原則とする。
 [A1] 細粒分 (土粒子の粒径が75 μm 以下のもの) の含有量が25%以下の土質材料。
 [A2] 250mmを超える大粒径のものを含まない硬岩ずり75mmふるい通過分中の細粒分の含有量が25%以下、かつ、大小粒が適度に混合して締固めし易いもの。但し、スレーキングする可能性のある材料 (泥岩、頁岩、凝灰岩) を使用する場合は、専門技術者の判断によるものとする。
 尚、設計水位 (H.W.L.) 以下の補強土壁土材 (砕石) については、砕石等粗粒土材料 (細粒分含有量5.0%以下、透水係数 $k \geq 1.0 \times 10^{-4}$) を使用すること。
- 地山部及び掘削面に異常な湧水 (設計図に示されていない排水対策外) が見られる場合は、別途対策、検討する必要がある。
- 施工時に原地盤状況を確認すること。
- 施工時にH.W.L.を確認し、設計時と異なる場合は再調査すること。

- 注) ・Lは、ストリップの敷設長さを表す。
 ・無記名のコンクリートパネルは"AF3"タイプを表す。
 ・補強土 (テールアルメ) 壁工法の延長は、壁前面を表す。
 ・補強材は、全箇所SS400ストリップ (80 \times 4) を取付ける。
 ・ \odot は、壁面から60 $^\circ$ の角度で、ガセットプレート (Sタイプ) を用いて下記の通り斜長考慮したストリップを取付ける。
 (基本長) (斜長考慮長)
 L=9.0m \rightarrow L=10.5m
 L=8.0m \rightarrow L=9.5m
 L=7.0m \rightarrow L=8.5m
 L=6.0m \rightarrow L=7.0m
 L=5.0m \rightarrow L=6.0m
 L=4.0m \rightarrow L=5.0m
 \textbackslash の範囲は砕石壁土材を使用する。

平成 年度	工事		
番号	縮尺	1:100	
下記の通り 設計者 照査者 監理者 署名			
(一) 岡田 信州 新町 久米路			
所長	課長	照査	設計
長野建設事務所			
設計会社	株式会社	管理技術者	署名
測量会社	主任技術者	照査技術者	署名
調査会社	主任技術者		

終点側 帯鋼補強土壁工法展開図

正面展開図 S=1/100



- 注) Lは、ストリップの敷設長さを表す。
 ・無記名のコンクリートパネルは"AF3"タイプを表す。
 ・補強土(テールアルメ)壁工法の延長は、壁前面を表す。
 ・補強材は、全箇所SS400ストリップ(80×4)を取付ける。
 ・ の範囲は砕石盛土材を使用する。

平成 年度		工事	
番号	縮尺	1:100	
(-) 奥川 信州新町 久米路2			
所長	課長	照査	設計
長野建設事務所			
設計会社	管理技術者	照査技術者	
測量会社	主任技術者		
調査会社	主任技術者		